

茅野市八ヶ岳通信

■ 茅野市美術館

茅野市ミュージアム活性化事業

茅野市内のミュージアムは、その文化資源を活用しながら、それぞれに活発な運営を行なっていますが個別の活動となってしまっています。このことから、ミュージアムの連携強化により、文化資源を効果的に活用し、地域の観光振興および地域の活性化に資することを目的とする、茅野市ミュージアム活性化推進委員会が組織されました。平成24年度から設置者も異なる様々な分野の6館（茅野市尖石縄文考古館、茅野市八ヶ岳総合博物館、茅野市神長官守矢史料館、茅野市美術館、京都造形芸術大学附属康耀堂美術館、蓼科高原美術館・矢崎虎夫記念館）による茅野市ミュージアム活性化事業を開始し、茅野市の玄関口とも言えるJR茅野駅に隣接する文化複合施設・茅野市民館内にある茅野市美術館を事業展開の拠点としました。

同事業による連携事業として、①パネル展示（7月21日～9月30日、縦2.4m×横1.25mのパネル8枚等を展示）、②



チラシ表



①パネル展示

ワークショップ&講座が大集合！（8～9月、全6回、各館の担当者が講師を担当）、③シンポジウム「地域とミュージアム」（9月30日、基調講演：藤森照信、コーディネーター：徳永高志、パネリスト：各館の館長・担当者）を行ないました。①はJR茅野駅の東西通路に面しているイベントスペースを会場としました。パネルは各館の概要と現在の展示の内容を6枚、各館の位置を紹介する地図を1枚、②の情報を1枚、計8枚としました。多くの市民や観光客に対し情報発信を行うことができました。②は各館の企画によるもので、各館について知り、体験できる事業とし、新規利用者層創出を目的としました。従来、ミュージアムに馴染みの薄かったような子どもから高齢者まで、



②ワークショップ&講座が大集合!
vol.1 糸でんわで自由研究
講師：若宮崇令（茅野市八ヶ岳総合博物館館長）



vol.2 “縄文”なレリーフを作つてみよう
講師：山科哲（茅野市尖石縄文考古館学芸員）



vol.3 映像で見る守矢史料館と周辺を歩く
講師：柳川英司（茅野市神長官守矢史料館学芸員）

幅広い年齢層の参加がありました。③は本年度の連携事業の総括的な位置付けで開催しました。茅野市と各館の現状をふまえ、

各館の連携のもとに生まれる未来像について考えました。その中で茅野市を含む八ヶ岳山麓に栄えた縄文文化や各館の文化資源を「市民」とともにどのように活かしていくかが課題として浮かびあがります。



vol.4 ほんがのじかん

講師:田中裕子(日本画家・「独創の旅一千住博期待の若手作家10人展」出品作家)、前田和子(同上)、外山寛子(同上)、渡邊昌美(京都造形芸術大学附属康耀堂美術館学芸員)



vol.5 矢崎虎夫一人と作品—

講師:梯裕史(蓼科高原美術館・矢崎虎夫記念館学芸員)

した。

茅野市は公民協働の「パートナーシップのまちづくり」が進められていることもあり、「市民」がボランティアやサポートとして活動する館も多くあります。そのうえで、今後は各館での個別の活動にとどまらず、「市民」が、連携したミュージアムと共に多様な文化資源を活

かしながら、様々な事柄を内外に発信できるような環境を目指していければと思います。



vol.6 夢のまちをつくろう

講師:古谷誠章(建築家・茅野市民館設計者)、前田忠史(茅野市美術館学芸員)



③シンポジウム「地域とミュージアム」

■八ヶ岳総合博物館

「諏訪の災害」展と 「きみのみらい・みらいのきみーかこさとし探しにいこう、絵本の中へ」展

「諏訪の災害」展

平成24年度は2回の特別展を開催しました。6月2日(土)から7月1日(日)までは、「諏訪の災害」展を開催しました。平成23年度に開催した「茅野市の遺跡に見る地震の痕跡」と内容が重複したところもありますが、縄文時代から現代にいたる災害について、考古遺物・古文書・写真によって展示しました。

発掘調査の成果では、茅野市阿久尻遺跡・諏訪市荒神山遺跡・岡谷市中島A遺跡の地震による地割れの状況を写真で展示しました。

文芸の資料では、島木赤彦が関東大震災の時に、東京へ行き、見聞したことを「アラ・ギ」に報告し、その時



のことを詠んだ歌を「灰燼集」や「アラ・ギ」に発表したものを展示しました。また、この時に販売されていた「震災絵葉書」を、市内で所蔵されていた方からお借りし、展示を行いました。

古文書では、中世のから江戸時代までの災害の記録を展示し、場所や災害の規模が事細かく書かれていました。

近代以降に起きた災害では、明治29年からの古い写真を展示しました。諏訪地方では、戦後、多くの災害、特に水害に遭っており、諏訪建設事務所や天竜川河川事務所、諏訪地方の各自治体に写真が残されており、各機関から写真をお借りして、写真を展示しました。特に、近年起きた平成21年の水害は記憶に新しいところであります。記憶を風化させないためにも、重要な史料であることを再認識しました。今回の展示では、地震や水害ばかりではなく、伝染病や雹害・雪害



平成21年8月9日 静香苑の被災状況

などの展示も行いました。

災害が多い昨今でしたが、過去の災害に学び、今後の防災対策の一助となればと考え、開催しました。

関連イベントとして、6月3日（日）に、産業技術総合研究所の近藤久雄氏による講演会を開催しました。

「かこさとし」展

7月14日（土）から9月2日（日）に「きみのみらい・みらいのきみーかこさとしと探しにいこう、絵本の中へ」展を開催しました。本特別展は、日本科学未来館で企画・制作・展示したものを、当館で展示したものです。

絵本作家であるかこさとしは、絵本を通して科学を伝えてきた人物で、本企画展は、世代をこえて私たちの未来について語り合う企画展です。かこさとしのメッセージを、絵や動画などにより、展示しました。

開催中は多くの方々にご来館いただきました。

平成25年も企画展を開催いたしますので、御期待下さい。

■ 尖石縄文考古館

尖石縄文考古館特別展『聖石遺跡展』

芹ヶ沢七石のひとつに数えられる聖石は、現在もメルヘン街道国道299号線と交わる農道の脇に重厚な存在感を放っています。この聖石にちなんで名づけられたのが、今年度の尖石縄文考古館特別展で取り上げた聖石遺跡です。

遺跡は国道299号線のバイパス工事と圃場整備に伴い、財団法人長野県埋蔵文化財センターによって平成10年に、遺跡の中心部と思われる範囲が調査されました。この調査により、遺跡は縄文時代中期後半から後期前半（年代でいえば、4500～3500年前）にかけての集落遺跡であることが判明しました。

この時の調査で出土した資料は報告書が刊行されたのちに茅野市に移管されましたが、今回の特別展示は移管後初めての展示となります。

展示は、平成24年（2012年）7月14日～11月25日を会期として、尖石縄文考古館特別展示室で行われました。聖石遺跡のはじまりや継続期間、集落の構造、特徴的な施設・遺物である埋甕や石棒などについてパネルで解説、実際にそのことがわかる土器や土偶、石棒を展示し、あわせて、あまり一般の方が目にすることのできない、土器等の出土状況の写真も展示しました。

聖石遺跡に人々が住み始めた時期は、八ヶ岳山麓でも遺跡数や各遺跡の竪穴住居の数が増加する時期と重なっています。いわば当時の「ニュータウン」ですが、接合する石器や持ち込まれて世代をこえて使われた土

器をもとに考えると、聖石遺跡をひらいた人々は、隣接する長峯遺跡からやってきた可能性が高いことがわかっています。そして、冒頭で紹介した芹ヶ沢七石の「聖石」は、開田工事等による移動前は、縄文時代の「聖石ムラ」のど真ん中にあったようです。

そのころに急速に広まる儀礼の痕跡と思われる埋甕や石棒も多く見つかっており、遺跡の年代も含め、縄文時代中期後半の非常に典型的なムラのひとつであると言えます。出産にまつわる儀礼行為の痕跡とされる埋甕については、7月29日と10月28日に行ったギャラリートークで、展示したパネルよりも詳しく紹介しました。ギャラリートークに参加された方からは、率直で鋭い質問をいただきました。

一昨年の『長峯遺跡出土土器展』もそうでしたが、この『聖石遺跡展』で展示した資料は、ほとんどが初公開のものです。その点で大変意義のある展覧会だったと思います。



『聖石遺跡展』ギャラリートーク

史跡整備に向けて

茅野市には尖石遺跡、上之段遺跡、駒形遺跡の3つの国指定史跡があります。この史跡を茅野市のまちづくり・人づくりにいかすことを目的とする『縄文の里史跡整備・活用事業』の実施に向けて、駒形遺跡と上之段遺跡の調査を進めています。調査は、地域住民、市内小学校の児童、尖石ボランティア・サークル、尖石縄文検定合格者の皆さんとの協力を得て行いました。

駒形遺跡の確認調査

駒形遺跡は黒曜石原産地として有名な霧ヶ峰の南麓にあります。縄文時代前期から後期の集落遺跡で、黒曜石製の矢じりを製作し、各地に運び出す役割を担った重要な遺跡であることから、平成10年に国史跡に指定されました。10数回

に及ぶ調査によって、縄文集落が指定地外に広がることが明らかとなりました。このため集落の範囲確認を目的とする調査を平成23年度から行っています。



駒形遺跡体験発掘

今年度は指定地の北側に近接する民有地をお借りして、7月から12月まで調査を行いました。指定地内から北に広がる縄文時代中期前半（5,000～4,500年前）の集落範囲が確認されたほか、縄文時代後期前半（3,700年前）の敷石住居跡が発見されました。

上之段遺跡の詳細分布調査

上之段遺跡は尖石遺跡とともに古くから知られた縄文時代の遺跡です。昭和10年から16年に調査が行われ、縄文時代後期・晩期の土器がまとまって発見されました。当時、長野県内でこの時期の土器の発見は珍しく、縄文時代の終わり頃の様子を知ることのできる遺跡として注目され、昭和17年に尖石遺跡とともに国史跡の指定を受けました。

上之段遺跡では今でも土器・矢じりなどの考古遺物が拾える環境にあります。この利点をいかし、範囲を決めて落ちている考古遺物をできる限り拾い上げ、これを整理して地下の様子を考えることにしました。このような調査が詳細分布調査と呼ばれるものです。地味で地道な調査ですが、地域の皆さんのがんばら来年度以降も継続する予定です。

諏訪社と鹿

平成24年8月4日（土）から10月8日（月）まで企画展「諏訪社と鹿」を開催しました。

守矢文書に「鹿なくては御神事はすべからず」とあるように、鹿は諏訪社の神事にとって、大変重要な「贊（にえ）」でした。近世までは、諏訪上社前宮十間廊に鹿の頭が75頭供えられていたといいます。

肉食が忌避されていた中世・近世において、鹿肉が諏訪社では食べられており、「鹿食免（かじきめん）」「鹿食箸（かじきばし）」を持っていれば、鹿肉を食べて良いとされていました。「業尽有情 故宿人中雖放不生 同証仏果（ごうじんうじょう こしづくじんちゅう すいほうふしょう どうしようぶつか）」という「諏訪の勘文」を唱えれば、狩猟を行い、食べることができたといいます。「諏訪の勘文」は、「前世の因縁で宿業の尽きたため捕えられた野生の鳥獣は

放して天然のままにおいても、どうせ長くは生きられず、野垂れ死にをする運命にある。そのため、人間すなわち成仮できる肉体の中に取り入れられ（殺して食べてやれば）、それによって人と同化して成仮するのがよい」という意味で、獵師の間では「諏訪の勘文（かんもん）」が伝えられたといいます。企画展では、「諏訪の勘文」のある鹿食免の版木などを展示しました。

また、江戸時代には鹿食免・鹿食箸とともに、鹿肉が江戸幕府の役人や、有力な檀那にも贈られていたようです。このような古文書も展示しました。



鹿食免・鹿食箸版木